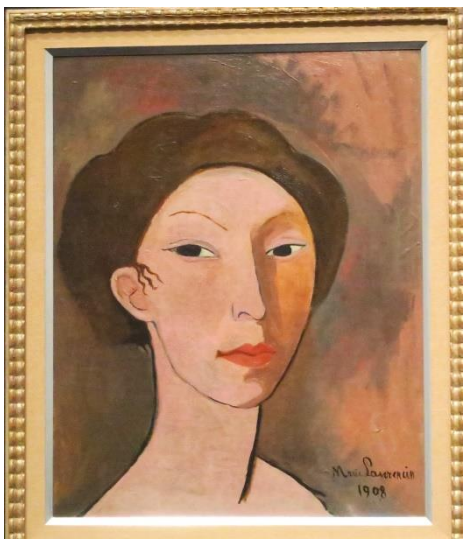
2024-2-20

アーティゾン美術館での「マリー・ローランサン展」鑑賞記

山本 雅晴

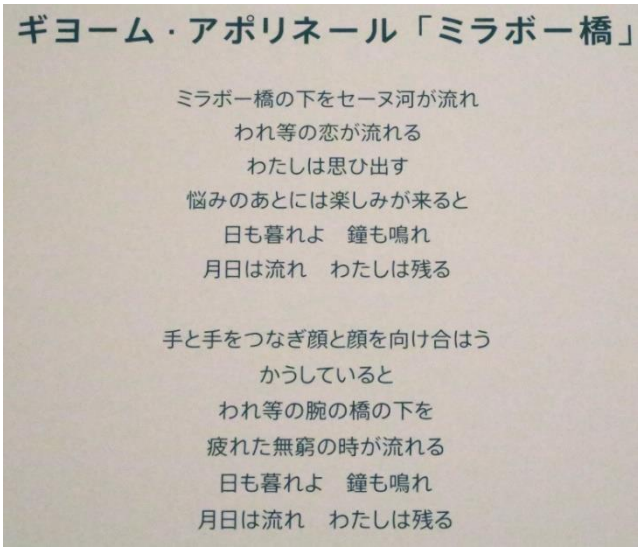
表題の展覧会が 2023-12-9～2024-3-3 開かれている。ローランサン(1883~1956)はユトリロと似た時代・境遇である。本画家について特別の関心はないが、日本との関わりがあり、日本の美術館や個人が所有する作品も多い。1992 年発行の「うちの美術館」、新潮選書に記載の「マリー・ローランサン美術館」(茅野市) にも 1996-11-3 に訪問したこともある。この美術館のオーナの高野将弘氏はタクシー会社などを創設した経営者だが、1970 年頃からローランサンの絵画を蒐集し始め、1983 年のローランサン生誕 100 年に美術館を創設するころには、油彩画・水彩画・デッサン・版画など約 400 点で、世界一の規模といわれている。開館の時にはフランスの政府や美術界からも注目されたらしい。残念ながら本美術館は 2011 年に閉館となり、東京のホテルニューオータニの美術館跡に一時展示されていた時もあり、1～2 度訪れたこともある。美術館は公開しないが収蔵作品は元のオーナの息子で学芸員でもある吉澤公寿氏が展覧会への貸し出し、情報発信活動を行っている。2022 年 10 月現在、コレクションは 600 点を越え（うち油彩画 98 点)。同学芸員はローランサン研究家として本も執筆している。「もっと知りたいローランサン～生涯と作品」東京美術、2023-1　この本を見てみようと丸善に立ち寄ったが、売り切れていた。なお、アーティゾン美術館での展覧会でも油彩画・各種資料など 20 点以上が吉澤氏から借用されていた。簡単に本展示会の展示作品を写真で紹介する。

1．東京駅・八重洲口近くのアーティゾン美術館(旧ブリヂストン美術館)　　2．6 階の入口のパネル



3．ローランサン自画像(1904,21 才)　4．ピカソの肖像(1908,27 才)　　5．自画像(1927,44 才)

ローランサンはパリのアカデミーで学び、ブラックと知り合いキュビズムの画家として活動を始めた。そのころの作品は図3、図4である。詩人・評論家のアポリネールと知り合い1907～12頃まで恋愛関係にあった。1911年にモナリザ盗難事件が発生し、アポリネールが疑いをかけられ逮捕されて長い間牢獄に入れられた。後で無罪と分かったが、彼と別れた。ローランサンは1914年にドイツ人の男爵と結婚したが第1次大戦がはじまり、敵国の夫とはフランスに在住できず中立国のスペイン・マドリードで亡命生活を送っていた。1915年、堀口大学は外交官の父の赴任地のマドリードでローランサンと遭遇し、彼女のお散歩の付き添いを務めアポリネールの詩などを紹介され、後に翻訳して出版するきっかけとなった。ローランサンは枕草子を翻訳本で読み浮世絵なども勉強する日本好みだったらしい。図6は堀口大学訳のアポリネールの詩である。



6．アポリネールの詩「ミラボー橋」

7．マドモワアゼル・シャネルの肖像 1923 オランジュリー美

図7の肖像画はシャネルが受とりを拒否した。理由は不明だ。ローランサンは、シャネルは有能だが、田舎者だ！同年代の女の火花が削裂した！本作品は展示なし1998，2018来日

8．花束　1939　　数少ない静物画

9．三人の若い女　1953　97 x 131　マリー・ローランサン美術館

紹介した作品のほかに、「ローランサントと文学」、「ローランサンと舞台芸術」などの展示もあった。当時パリで上演されていた、ストラビンスキーなどの斬新なバレエの舞台装置や衣装などのデザインを頼まれ、好評であった。これらの仕事は、大家のピカソやマティスらも担当したことがあるらしいがシャガールやローランサンの方が、観客には受けるように思われる。今回のローランサン展は今まで見たローランサン展で最も充実した内容であった。おそらく、本場フランスでもなかなかこれだけの内容の展覧会はできないかも？